

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 60 回 「セコイ」国にはなりたくない！

日中国交正常化を果たした、故田中角栄。いわゆるロッキード事件の首謀者として、晩年は実に惨めな扱いを受けていた。我国では刑事被告人として、輝かしい彼の人生全てを否定するかのごとく、マスコミや世間の厳しいまでの非難を受け、余儀なく隠遁生活を強いられていた。その心労のためか、病魔に倒れ、角栄氏を知る人にとって、とても、見るに耐えられない生活を送っていた。

「今太閤」、「人間ブルトナー」と勝手にはやし立て、成長日本のシンボルにまつり上げた同じマスコミが、「英雄・角栄」をどん底に突き落としていった。そんなマスコミに、ほとんど全ての国民が便乗し、角栄氏の実績と栄光を完璧に葬り去った。

そんな角栄氏を最後まで丁重に扱い、身体も言語も不自由になった彼を、万全の準備のもと招き入れ、彼の功績をいかに讃え、労ったのは、唯一中国だった。

あの時の角栄氏の感激の「涙」は、小生の人生の中で、忘れることの出来ないワンシーンである。実は小生、角栄氏の絶頂期に、二度ほどお会いしていた。その印象は、魅力溢れる大人物以外何者でもなかった。

井戸を掘った人の功績は、一生忘れない...古い中国の故事を誇りとしている中国国民は、日本でどんな扱いを受けていようが、角栄氏への恩義を、形で表してくれた。角栄氏は、我国の国民でなく、中国の人によって、晩年報われた...そんな思いであの「涙」を見たのは、小生だけだったろうか、実に複雑な感情に陥ったものである。

昔の日本には、恐らくこんな価値観があったような気がする。平気で人を裏切り、その「恩義」など微塵も感じない日本人が、残念ながら、小生の周りにも存在する。商業道德、今風に言えばビジネスモラル、こんなものを平然と無視し、何の思慮なく行動する人種がいる。彼らにモラルがあるとすれば、「俺だけが目立ち、結果、儲かればいい」「出し抜いてやる」、「先につばつけたのが勝ち」、恐らくこんなところなのだろう。

商売も、お付き合いも、人があって成り立っている。自分ひとりだけが存在するわけではなく、多くの人に触れ合い、交わりあって成立するものである。相手への配慮、お世話になった人への感謝、つまり、礼儀作法や恩義、気配りや慈悲の心、こんなものは右や左の「イデオロギー」ではなく、人として当たり前の教養であり、つまり、常識であったはずである。

中国人が素晴らしいという以前に、何とも日本人としての「寂しさ」に、大袈裟に言えば「ショック」を感じざるを得ない。こんな「セコイ」日本が、将来中国に圧巻される日が来ること、あるいは「覚悟」しなければならないのか...本当にさびしい話である。